

体罰問題 自殺者が出ても賛否両論の「異常な世界」

日本経済新聞 1月10日

体罰を受けた男子生徒が自殺した大阪市立桜宮高校で9日夜、緊急の保護者説明会が開かれた。学校側は陳謝し、再発防止策などを説明。保護者らは「なぜ体罰に気付かなかったのか」と厳しい意見をぶつけた。体罰を加えたとされるバスケットボール部顧問の男性教諭は説明会を欠席した。

大阪市教育委員会への取材によると、顧問は自殺した生徒以外の部員に対する体罰も認め、「発奮させるためだった」と説明しているという。

(略)

説明会は約3時間に及び、保護者から「なぜ自殺する生徒が出るまで問題を放置したのか」と学校の管理体制のずさんさを批判する声が上がった。一方、「愛情のある体罰ならば許されるのでは」と擁護する意見も一部で出たという。

出席した保護者の男性(50)は「指導と体罰は紙一重だが一線を越えてはいけない。先生と親、生徒とのコミュニケーションが重要だと思う」と話した。

産経新聞 1月9日

(略) 顧問の男性教諭(47)は、高校バスケット部の指導者として全国的に知られる存在で、16歳以下の男子日本代表チームのアシスタントコーチも務めていた。以前から体罰も含めた“熱血”指導で知られ、同部を全国大会の「常連校」に育てたという。

(略)

顧問は平成6(1994)年4月から保健体育科教諭として勤務。学校での評判について、顧問を知る卒業生からは「先生がやってきたことは間違っていない」と擁護する声も聞かれた。ある関係者は、顧問の指導方法について「いいチームをつくることで評価されているが、古いタイプ」と指摘。中高の運動部では「叱られ役」を意図的につくる場合があり、主将がその役になるケースが多いという。「強く叱ったとしてもフォローは絶対に必要。コーチもいたはずで主将がそこまで思い詰めていたことになぜ気付かなかったのか」と残念がった。

上の2つの記事ばかりではなく、教育評論家やスポーツ評論家、保護者の中にも、体罰を肯定するような発言があることに驚愕です。学校の常識は世間の非常識といわれますが、いかなる体罰も絶対的に間違っているという当たり前の認識がない、もはや「異常な世界」としかいいようがありません。ちなみに、「愛情のある体罰ならば許されるのでは」→許されません。「指導と体罰は紙一重だが一線を越えてはいけない」→紙一重ではなく、体罰は体罰です。「強く叱ったとしてもフォローは絶対に必要」→体罰という手段で叱ってはいけません。「コーチもいたはずで・・・なぜ気付かなかったのか」→体罰をした顧問の責任で、コーチの責任ではありません。と、私は考えます。

指導中、思わずコツンと叩いてしまった、手が出てしまった、これは体罰です。この顧問の場合、叩いてしまったのではなく、意図的に殴っています。これは体罰ではなく暴力、暴行です。刑事罰に問われる行為です。指導を隠れ蓑にした暴力は全面的に排除しなければいけません。

1月9日 編集手帳(読売新聞朝刊)

子をもつ親は誰もが一度は、そういう時間を経験してしよう。〈子を殴(う)ちしながき一瞬の天の蟬(せみ)〉。俳人、秋元不死男の句にある◆蟬が鳴いている。何らかの理由で、父は子の頬を打つ。ほんの零コシマ何秒かの出来事だが、父親にとっては万物が静止したような「ながき一瞬」だろう。子供の頬から赤みが引いたあとも、父親の手には痛みが残る◆親とはそういうものである。血を分けた自分が加減しない手を上上げるのさえ、これほど苦しいのに、他人に殴らせるわけにはいかない。いじめや体罰の報道に接するたび、親御さんの身になって腹が煮え返る◆大阪市で市立高校2年生の男子生徒(17)が自殺した。所属するバスケットボール部で顧問の男性教諭から体罰を受けていたという。何が原因の、どういう種類の、どの程度の体罰であったのか。「一時的な悩みに対する取り返しのない解決法」といわれる自殺以外に、道はなかったのか。調査を待たなくては分からないことばかりである◆わが子を亡くした瞬間から、親御さんにとって万物は静止したままだろう。そのことだけは分かる。われも親なれば。

「体罰は自主妨げ成長の芽摘む」

朝日新聞デジタル1月11日より 元巨人軍 桑田 真澄

【岡雄一郎】 体罰問題について、元プロ野球投手の桑田真澄さん(44)が朝日新聞の取材に応じ、「体罰は不要」と訴えた。殴られた経験を踏まえ、「子どもの自立を妨げ、成長の芽を摘みかねない」と指摘した。

私は中学まで毎日のように練習で殴られていました。小学3年で6年のチームに入り、中学では1年でエースだったので、上級生のやっかみもあったと思います。殴られるのが嫌で仕方なかったし、グラウンドに行きたくありませんでした。今でも思い出したくない記憶です。

早大大学院にいた2009年、論文執筆のため、プロ野球選手と東京六大学の野球部員の計約550人にアンケートをしました。

体罰について尋ねると、「指導者から受けた」は中学で45%、高校で46%。「先輩から受けた」は中学36%、高校51%でした。「意外に少ないな」と思いました。

ところが、アンケートでは「体罰は必要」「ときとして必要」との回答が83%にのびました。「あの指導のおかげで成功した」との思いからかもしれません。でも、肯定派の人に聞きたいのです。指導者や先輩の暴力で、失明したり大けがをしたりして選手生命を失うかもしれない。それでもいいのか、と。

私は、体罰は必要ないと考えています。「絶対に仕返しをされない」という上下関係の構図で起きるのが体罰です。監督が采配ミスをして選手に殴られますか？ スポーツで最も恥ずべきひきょうな行為です。殴られるのが嫌で、あるいは指導者や先輩が嫌いになり、野球を辞めた仲間を何人も見ました。スポーツ界にとって大きな損失です。

指導者が怠けている証拠でもあります。暴力で脅して子どもを思い通りに動かそうとするのは、最も安易な方法。昔はそれが正しいと思われていました。でも、例えば、野球で三振した子を殴って叱ると、次の打席はどうすると思いますか？ 何とかしてバットにボールを当てようと、スイングが縮こまります。それでは、正しい打撃を覚えられません。「タイミングが合っていないよ。どうすればいいか、次の打席まで他の選手のプレーを見て勉強してごらん」。そんなきっかけを与えてやるのが、本当の指導です。

今はコミュニケーションを大事にした新たな指導法が研究され、多くの本で紹介もされています。子どもが10人いれば、10通りの指導法があつていい。「この子にはどういう声かけをしたら、伸びるか」。時間はかかるかもしれないけど、そう考えた教え方が技術を伸ばせるんです。

「練習中に水を飲むとバテる」と信じられていたので、私はPL学園時代、先輩たちに隠れて便器の水を飲み、渴きをしのいだことがあります。手洗い所の蛇口は針金で縛られていましたから。でも今、適度な水分補給は常識です。スポーツ医学も、道具も、戦術も進化し、指導者だけが立ち遅れていると感じます。

体罰を受けた子は、「何をしたら殴られないで済むだろう」という後ろ向きな思考に陥ります。それでは子どもの自立心が育たず、指示されたことしかやらない。自分でプレーの判断ができず、よい選手にはなれません。そして、日常生活でも、スポーツで養うべき判断力や精神力を生かせないでしょう。

「極限状態に追い詰めて成長させるために」と体罰を正当化する人がいるかもしれませんが、殴ってうまくなるなら誰もがプロ選手になれます。私は、体罰を受けなかった高校時代に一番成長しました。「愛情の表れなら殴ってもよい」と言う人もいますが、私自身は体罰に愛を感じたことは一度もありません。伝わるかどうか分からない暴力より、指導者が教養を積んで伝えた方が確実です。

日本のスポーツ指導者は、指導に情熱を傾けすぎた結果、体罰に及ぶ場合が多いように感じます。私も小学生から勝負の世界を経験してきましたし、今も中学生に野球を教えていますから、勝利にこだわる気持ちは分かります。しかし、アマチュアスポーツにおいて、「服従」で師弟が結びつく時代は終わりました。今回の残念な問題が、日本のスポーツ界が変わる契機になってほしいと思います。

「柔道休罰と山口香」

<http://openblog.meblog.biz/article/13955433.html> より転載

朝日新聞（有料版ネット 2013-02-06）

「昨年9月、園田隆二前監督が暴力行為をしていたと、私自身、耳にしました。個人的に何人かの選手に話を聞いて事実を確認し、全日本柔道連盟の幹部に伝えました。まずはきちんと調べて、広く選手に聞き取りをして下さいとお願いした。ちょうどロンドン五輪の検証をする時期でもあり、この際だから調査した上で次の体制を決めるべきでしょう。ところが全柔連は園田前監督にだけ話を聞き、嚴重注意の処分にした」

「園田前監督が被害者に心ない態度をとった。彼女が頑張った試合の後、『おれが厳しく指導してきたことが今回につながったんだ』というようなことを言ったというんです」

「複数の選手がその場にいたから間違いありません。私は再び全柔連幹部に電話を入れました。これが反省した態度ですか、何を嚴重注意したんですか、と」

「私は女子柔道家として、日本代表でナショナルフラッグを背負う選手に、そういう態度をとることは絶対に許せません。まして言動を注意された後にみんなの前で暴力を肯定するようなことを言うなんて言語道断。日本の女子柔道が長い時間をかけて強くなってきたのは、選手一人ひとりが力を合わせて切り開いてきたからです。決して暴力的な指導をしたからではない」

——それで次の一手が、12月の選手たちによるJOCへの告発だったのですか。

「私もいろいろ考えました。相談してくれた選手には『こういう結果になって申し訳ない。私の力がなかった』と謝りました。そして『申し訳ないが、ここから先は私ができることじゃない』と話しました。私が何を言っても、私の意見としか受け止められない。私と全柔連という対決の構図になり、問題の本質がずれてしまう。山口に対する対処をされてしまうと思いました」

「私は選手に言いました。『ここからはあなたたち自身でやりなさい』と。さらに『あなたたちは何のために柔道をやってきたの。私は強い者に立ち向かう気持ちを持てるように、自立した女性になるために柔道をやってきた』という話もしました」

「私はもう助けられない。だから自分たちで考えて、と。そこからは私は直接的には関与していません」

「ここからが私たちの仕事だと思っています。時間がたつにつれ、彼女たちのことを『何様なんだ』と言う人たちが必ず出てきます。今度は私たちが矢面に立って守ってあげなきゃいけない。柔道界をあげてサポートするという姿勢が大切です。訴えたことが悪いんじゃない。問題をすりかえてはいけません」

「私は選手が自発的に起こした行動を見守り、自立するのを待っててあげたいという気持ちです。選手の自立を助ける。それがスポーツでしょう。選手は臆せず意見をはっきり言える人間に成長しているんです」

読売新聞（朝刊 2013-02-10）

「私が言ったことが引き金となって彼女たちが決起したのであれば、責任は私にある。あの子たちが否定されるようなことがあれば、二次被害、三次被害にもなりかねない。」

「(園田監督を) そのまま続投を発表したら柔道も連盟も、園田くんも大きなダメージを受けますよと訴えた。発表を急がず、その前に園田くんが全員の前で謝るとか、いろいろ提案したけど、いくら言っても駄目だった」

「何度ボールを受け投げてもらえなかったのが残念。今できるなら、何であのときにできなかったのかと、私はそこが一番悲しい」